

[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 山 本 精 三

本研究は、外傷性腕神経叢損傷患者に対して、術前待機中に造影MRI検査を行い、腕神経叢節前損傷の診断の感度および精度を高めることを試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 外傷性腕神経叢損傷患者に対して、術前待機中に造影MRI検査を行うことにより、従来報告されてきた外傷性髄膜瘤の描出に加えて新たに脊髄表面の造影効果、脊髄神経根の造影効果の所見を観察できることを明らかにした。
2. 外傷性腕神経叢損傷患者について、節前損傷にたいする造影MRIによる外傷性髄膜瘤、脊髄表面の造影効果、脊髄神経根の造影効果の所見による感度、特異性、精度を明らかにした。
3. 頸髄神経根の損傷形態を術中所見より分類し、造影MRIを行うことにより特に腕神経叢節前損傷の診断をより正確に行えることを明らかにした。

以上の結果から、本論文は、造影MRIにより腕神経叢節前損傷患者では従来報告されてきた外傷性髄膜瘤の所見に加え、新たに脊髄表面の造影効果、脊髄神経根の造影効果の所見を観察することができることを明らかにした。また、これらの所見による節前損傷の診断に対する感度、特異性、精度を明らかにした。さらに術中所見との対比により造影MRIを行うことにより節前損傷の診断を正確に行えることを明らかにした。

本研究は、外傷性腕神経叢節前損傷患者での術前MRIで従来報告されてきた外傷性髄膜瘤の所見に加えて造影MRIにより新たに脊髄表面の造影効果、

脊髄神経根の造影効果の所見を観察できることを明らかにし、これらの所見と手術所見との対比を初めて明らかにし、腕神経叢節前損傷の診断をより正確に行えることを明らかにしたものであり、学位の授与に値するものと考えられる。